それはさておき
閑話休題

岩岡中正

(1) 仙台にて―晩翠草堂のこと

学会で久しぶりに仙台へ行った。青葉城を散歩して戻ると、ホテルの目の前に土井晩翠の晩翠草堂があった。晩翠は、私の専門にも少し近い英文学者で、カーライルやバイロンの翻訳で有名だ。もちろん「荒城の月」で知られる詩人でもある。戦災で住居と三万冊の蔵書を失ったが、旧制二高の教え子や市民が先生のために建てたのが、この草堂である。30人ほどの生徒と一緒に教室で撮った写真がある。それが何ともいえず敬愛と友情に満ちていて、見ていて心があたたかくなった。

自分たちの先生が誠実に研究に励むのはもちろん、その才を発揮し国民的詩人として名をあげ、その目の前の師の深い教養から日々薫陶を受けるとは、どんなにか誇らしいことであったろう。一枚の写真がそれを物語っている。

しかし今日、この「薫陶」や「教養」といった言葉は、ほとんど死語になりつつある。これらの言葉が示すような、人間や人間間にある豊かな関係やそれを表現する言葉は、今や消滅しつつある。つまり、近代の幾何学的精神の現代版であるステレオタイプ思考やデジタル思考が、「気配」や「思い」といった、人間の知と感性の繊細で豊かな領域を追放してしまった。

(2) 教養と言葉

それにしてもこの半世紀、「教養」という言葉も随分軽くなったものだ。旧制高校や岩波文庫に代表される人格主義的な教養はもう古いといわれ続けてきた。戦後社会において知がどんどん機能化・専門化・大衆化していくなかで、かつての教養は高踏的で時代とミスマッチだとされてきた。

しかし、知には目的や理念に関する知と、手段や技術に関する知があるはずだ。実は両方とも必要なのだが、今日後者だけがますます偏重され、前者を育む教養は、まるで無用の長物のように扱われている。もちろん現代の知は高踏的であったり世間と無縁であったりしてはならない。実は今こそ実践知や臨床知が求められているのだが、それは、しっかりした目的や理念に関する知（教養）に支えられなければならない。具体的には、私たちはこの根本的な知恵と高度な知識でもって地域の現実の課題と向き合ってこそ、私たちの知を本物にしていくことができる。目の前の具体的な課題を解決して私たちの知を日々自己変革していくという「知の循環」の中にこそ、これからの大学の存在理由がある。

教養と同様、今日ますます言葉が軽くなった。いうまでもなく、わが国で言葉は言霊（ことだま）という魂のこもったものとされてきたし、欧米でも「契約」はキリスト教以来の言葉の神聖性によって担保されてきた。それが今日、永田町の政治の言葉も携帯の会話やファーストフード店のマニュアル語も、目をおおいたくなるほど軽い。政治についていえば、利益政治（インタレスト・ポリティックス）で既に結論を決めていて、言葉や討論による合意形成の必要はないといわんばかりである。そのような場合、言葉は虚構と化しいい繕いの道具となる。

言霊の幸（さきは）うこの国で、いま言葉が衰弱しつつある。人間の交わりの力も知の力も弱りつつある。公共性とは開かれた自我を前提とするが、これがまるで閉ざされ立ち竦んでいるかのようだ。過度の自由主義や功利主義つまりは近代（化）の行きつく先がこの姿である。私たちはどうやって共同性や公共性を回復できるか、それが

今日の私たちの最大の課題である。「いま言葉に力はあるか、文学に力はあるか」とは、最近石牟礼道子さんがよくいわれることだ。私たちは先ず、言葉に力を取り戻すことから始めなくてはならないだろう。

(3) 石牟礼道子さんを訪ねて

先日、「公共哲学フォーラム京都」に参加した研究者や編集者で、作家・石牟礼道子さんを訪問することになった。『石牟礼道子全集・不知火』（全十七巻、藤原書店）の刊行が開始されたばかりのお忙しい時期だが、石牟礼さんには、朝一時間ほどいただいた。とてもものびやかで楽しいお話をうかがうことができた。

話は、幸福についてである。私たちは「間を生きる」、あるいは間にある「場」としての公共性に関心があるのだが、話はそこから、「石牟礼さんはどんな時が幸福ですか」という質問になった。石牟礼さんの答えがまた素敵で、自分が風となって吹かれているとき、自分が感受性に満ち満ちて宇宙と一体化していると実感している時が一番幸福だといわれるのだ。つまり、小さな自我を超えて、つまり自我と対象との対立を超えて宇宙や自然と一つになったときに幸福になる。そのとき人間は、大きな存在の一部となって風のようにともにそよぐのである。そこで私たちは、大きな存在とともにある安らぎと真の自由を獲得するのである。

私たちはいま、自己中心の小さい近代の知を超えなければならない。もっと心と感覚を開いて、「もだえ神さん」のような最も繊細で敏感な共感能力や想像力を取り戻さなくてはならない。これこそ、「義によって」その半生を水俣病の患者さんへの支援に捧げた石牟礼さんに代表される、日本の基層民が本来もっていた心情ではなかったか。

私たちはいつから、上は政治家をはじめとしてかくも魂のこもらない軽々しい言葉で話す人間になってしまったのか。もっと自然やいのちへの畏敬を通して人と人とが真に心を通わせることができる言葉と場を回復せねばならない。「私は、風にそよぐ雑草の一本として精霊の物語を伝えていきたい」という石牟礼さんの素敵な言葉が心に残った。この日私たちは石牟礼さんと同じ風に吹かれて、その魂の物語を聴くことができた。

いわおか　なかまさ　法学部教授・図書館長
主著：『詩の政治学ーイギリス・ロマン主義政治思想研究』（木鐸社 1990）
『転換期の俳句と思想』（朝日新聞社 2002）
［写真：熊本日日新聞 平成16年4月30日付より］

学術情報経費の新設

学生や研究者に安定した学術情報の提供をすることは、大学図書館における重要な基本機能のひとつですが、その基盤となる経費の確保について本学では16年度から学生用図書費、データベース経費、電子ジャーナル経費を包含した「学術情報経費」という予算事項が設置されました。

これによって、安定的かつ計画的な資料購入が行えるようになり、より効率的な資料整備計画を立てることが可能となりました。